

フローベールの『11月』における虚無思想の背景と創作の苦悩

盛 政 文 子*1

要 約

レアリスムの代表作『ボヴァリー夫人』の作家ギュスターヴ・フローベールは近代小説の祖とされている。

一方、それ以前の作品はフローベールの信念獲得の過程で書かれた、ロマンチズムの作品と言える。その中で、小説『11月』は、まさに彼の青春期と壮年期との過渡期に書かれた作品と位置付けられる。この作品の中にフローベールは、多情多感な青年の面影と、虚無思想に捉えられて苦しむ姿とを同時に描いている。

フローベール自身の恋愛が実を結ぶことはなかった。自らの生活に幸福を実現できなかったのは、人生に対して求めることが強すぎたためではなかろうか。

彼は女性を常に理想化して描いていった。恋は彼にとって、美しいものとして制作された、文学的テーマであった。女性は彼の作品の中で、肉体的位置を文学的位置まで高めたに過ぎなかった。

フローベールの作品中の主人公たちは、恋愛から一時的な満足しか味わえず、常に新しい恋を求めて苦悩する。求めても叶えられないと自覚する時、虚無感が生まれ、死が必然的となり、死によって救われることを欲し始める。まさにフローベールの著名の批評家であるチボーデが語るところの「ボヴァリー症」の一面を有している。

フローベールの小説には、絶えず現れる倦怠と、人生の失敗とが描かれている。強い想像力を持つ彼は、全てのものを文学に結晶させ、現実をより美しいものとして夢み、現実をより真実なものに再構成するのである。

作品の成功にもかかわらず、19世紀の偉大な小説家、フローベールは、常に心が満たされることはなかったと思われる。若きフローベールにとって、この時にはまだ虚無思想から逃れるための文学的創作活動によっても、虚無を征服し得なかったのではないだろうか。だからこそ、虚無感フローベールの文学の不変のテーマとなり得たのである。

はじめに

フローベールが生きた時代は、写実主義から自然主義への過渡期であった。彼の『ボヴァリー夫人』の出版は、裁判を含めて、特にレアリストたちに大きな反響を呼んだ。この小説は、フローベールの客観手法を確立した最初の小説であり、写実主義小説の典型として、近代小説の祖とされている。

一方、『ボヴァリー夫人』以前の作品は、フローベールの信念獲得の過程を表す。青春時代には、ロマンチズムの作家に心を惹かれ、『地獄の夢』『苦悶』『スマール』など、ロマンチックな作品を多く手掛けている。特に、ジャン・ブリュノーが述べるように『11月』は他の初期作品とは異なって、長く考え

抜かれ、練られた作品であり、フローベールの真の文学的創造である¹⁾。しかし、彼自身が後に『11月』について語っている。

「珍しく『11月』を読み直しました。私は11年前も今と変わらぬ人間でした。……しかし、この作品はよいものではありません。数々の醜悪な悪趣味が目立ちますし、要するに全体として力不足です。手を加える術もないし、書き直す他ないでしょう。所所によい文章よい比喩はありますが、文体の組織がありません。」

1853年10月28日か29日
ルイズ・コレ宛²⁾

*1 川崎医療福祉大学 非常勤講師
(連絡先) 盛政文子 〒700-0921 岡山市東古松2-10-5

『11月』は、やはり抒情的作品であり、ロマンチック作家の抒情的調子と弱々しさから抜け出していない。しかし、この作品は、この偉大な「芸術家」の青春の姿を知る上に残された唯一の記録である。『11月』は彼の青春時代の終わりであり、彼の壮年期の朧ろげな始まりである。

「芸術家の生涯の最初の時期には、己の持つ真に内密のもの、独創的なもの、個人的なものを己の他に投げ出してしまふ方がよりよい結果をもたらす。」

1845年5月13日

アルフレッド・ルポワトヴァン宛²⁾

と彼自身が語っているが、彼は『11月』によって、告白文学の傑作の一つを創り、青春期だけの書物の典型を示したのである。

この小説の主人公（わたし）は、肉欲と死の想念に取り付かれ、マリヤという娼婦によって肉欲の満足を感じたものの、幻滅を味わっただけで死んでいく。主人公は、多情多感な青年、フローベールの面影を伝え、虚無思想に捉えられたフローベールの苦しむ姿を同時に現している。ここでは主人公が、フローベール自身、また、ある世代の代表であるという意味で、フローベール的人間と称し、フローベールの虚無思想を追求してみたいと思う。フローベール的人間の幸福感、人生観を通じて、フローベールが如何にしてこの虚無思想からのがれ、自我の世界から抜け出そうとしたのか考えてみたい。

フローベールの恋愛

ラ・ヴァランドは、フローベールの初期の恋愛について次のように述べている。

「……善良な青年の姿しかうかがわず、……その恋愛は純潔で、彼の自己分裂を深めるものとなった。それだけに、初期の恋愛は彼の生涯に大きな意義をもち、永続することによって穏やかな愛情に近づいてゆく³⁾。」

フローベールの作品には、初期の恋愛をモデルにしたと思われる恋愛がいくつか描かれている。青年期のフローベールは、恋を夢み、その幸福感に浸っていた。彼にとって、恋愛は、想像力の機能が女性に透入し、その美に同化することだった。恋を夢みるフローベールの恋の体験には、大きく分けて、3つの段階がある。

まず初めに、妹カロリーヌの友達で、イギリスのフランス大使館付海軍武官の娘のヘンリエット・コ

リアとジュルトリュード・コリア¹⁾に対する少年の恋である。彼女らは、毎年夏に、家族と共にトルーヴィルで過ごし、そこでフローベールは彼女らを知る。恋というよりもむしろ心を惹かれただけで、しかも、その惹かれた心を告白する術を知らない少年は途方に暮れていた。この恋は、『11月』の前編というべき『狂人の手記』の二人のイギリス少女に対する初恋として描かれている。次に、フローベールの同じ地、トルーヴィルの恋、雷電的情熱恋愛である。15才のとき、13才年上の美しい人妻、エリザ・シュレザンジェに海水浴場で出会う。上機嫌で野卑な言動を撒き散らす活動家である夫、モーリス・シュレザンジェに対して、人妻の慎ましい着ききは、フローベールの慕情をそそる。フローベールは、彼女と相思相愛の仲になることを夢みしたが、間もなく、彼女の抵抗によって、その実現不可能を思い知らされる。しかし、エリザ・シュレザンジェは、彼にとって最愛の女、この世では実現不可能な憧れという恋の世界を夢みさせてくれる女である。彼女は、フローベールの胸裡に崇むべき存在となり、彼のロマン的自我構造の中核となる。さらに、彼女を知ってから、トルーヴィルは、彼にとって、忘れられない思い出の地となる。また、『狂人の手記』のマリヤの黒い瞳、陽やけした身体は、シュレザンジェの外観を思い出させるだろう。『11月』のマリヤでは過敏な放縦な想像力をもって、『感情教育』のマリー・アルヌーでは感動を内に秘めた、思いやりのある淑かさを湛えて、彼女は描かれている。フローベールは彼女と出会った2年後に、再びトルーヴィルを訪れ、次のように、過去の恋を意識するのである。

「どうして私が愛しているのが彼女にわかったのだろう。私は、あの時、彼女を愛していなかったのだし、私が今まで言ってきたことは、皆嘘だった。私が彼女を本当に愛し、彼女を欲しているのは、今なのだ。海辺を、森の中を、野原を、ただ一人歩きながら私は、そばにいて私に語りかけまた答えてくれる彼女の存在を空想しているのは今なのだ。……情熱とはこうした思い出だったのだ⁴⁾。」

彼の中で恋が情熱となるためには、まずすべてが過去のものとなり、精神的、内面的変容、孤独を通さなければならない。これまでの恋はプラトニックなもので、後に彼の過去の思い出として、生涯、心に燃え続けるのである。

次に、フローベールがピレネー山脈およびコルシカ島周遊の旅²⁾で出会ったウーラリー・フーコーとの恋である。彼は、1840年、マルセイユのリシュ

リユー・ホテルで南アメリカからやってきたフーコーと出会う。ジャン・ブリュノーが述べているように、『11月』のマリヤは、明らかにフーコーを土台に描かれている。たとえば、次のようなマリヤとフーコーの類似点を挙げるができる。ルポワトヴァンへの書簡には、フーコー夫人の部屋に続く階段が描かれる。

「私は、マルセイユでこのフーコー夫人には会わなかったが、彼女の家や戸、そこを上った階段を見た。それらは、もはや使われていなくて、彼女に会いにやって来た人々のすべての足跡にもかかわらず、5年たっても古くなっていなかった。」

1845年5月1日
ルポワトヴァン宛²⁾

『11月』においてもマリヤの部屋に続く階段が登場する。

「僕は階段を登った。階段は黒ずんでいた。踏み段はぼろぼろで、足の下でがたがた揺れた^{5,6)}。」

また、マリヤとの愛の夜の雨の音は、マルセイユの思い出の移しである。ルイ・ブイエ¹³⁾への書簡には次のように書かれている。

「私に(ダマのホテルの中庭の水盤が問題になるのだが)泉の音は、リシュリユー・ホテルで私が10年前にもなるが、ラングラッド生まれのフーコー夫人に接吻したときを思い出させた。」

1850年9月4日
ルイ・ブイエ宛²⁾

『11月』にはこのように書かれている

「雨が降っていた。僕は雨の音を聞き、マリヤの寝息を聞いていた^{5,7)}。」

ジャン・ブリュノーが述べるように『11月』のマリヤはウーラリー・フーコーであると同時に、娼婦の世界の女、いわゆる典型的な快樂の娘、愛のシンボルである。

「空想的な主人公、内的で生理的な小説の現実主義的人物の中でマリヤは著者の代弁者となり、フローベールは彼女によって、愛についての彼の考えや売春についての彼の理論を現している⁸⁾。」

とジャン・ブリュノーは語っている。ウーラリーの4通目の手紙には、次のような愛の美しい理論が書かれている。

「……ギュスターブ、愛することは、彼女に献身し、彼女のために考えを犠牲にし、彼女以外意識せず、彼女以外の喜びや楽しみを持たず、彼女に近づくと、幸せと愛で心をときめかせ、彼女の眼ざしに夢中になり、彼女のいない時は彼女を望み、昼に夜に至る所で彼女に会い、彼女に献身し、彼女のそばで生きるために、同じ空気を吸い、彼女の胸や腕に抱かれて死ぬために、すべてに挑み、すべてを捨てなければならない。……そのためには、火のような魂……が必要である。もし、それが、人生でいくつかのすばらしい瞬間を手に入れさせるならば、それは涙と後悔に価する⁹⁾。」

フローベールは、フーコーによって、肉体的快樂とその後の失望を経験したと思われる。しかし、恋の虜となって、この恋に溺れ込みはしなかった。この恋も、フローベールにとって、実生活というよりも夢の世界を占めていた。彼は、恋することや、肉体的快樂を頭の中で想像しているにすぎず、それを実行する勇氣はなかったように思われる。恋の冒険に足を踏み入れるのは、ルイズ・コレの出現を待たなければならない。

25才のフローベールは、1846年6月、プラディエ¹⁴⁾のアトリエで、38才のルイズ・コレと出会う。彼女は、エクス生まれの女流詩人で、ローマ賞受賞者の国立音楽学校教授の作曲家と結婚していた。しかし、同じ金髪、同じノルマンディー生まれということもあって、二人は意気投合したらしい。ルイズはヴィクトル・クーザンをはじめとして、終身書記のヴィルマン、ヴィクトル・ユゴー、アルフレッド・ド・ミュッセ、アルフレッド・ド・ヴィニー伯爵らと関係を持ち、そのおかげで、アカデミー・フランセーズの文学賞を毎年受けていた。フローベールとルイズとの関係は、東方旅行中一度中断したが、『ボヴァリー夫人』完成前、1855年まで約8年間続き、多くの書簡が残されている。

「君の送ってくれる詩は……もっとも冷酷な精神を捉えてしまう。妖婦の絡みつような力が君にあるのですよ。そうですとも、君は君の魅力で僕を包んでしまったのです。君そのものを僕に滲み込ませてしまったのです。ああ、もしも僕が君にとって冷淡に映り、僕の皮肉が辛辣で君を傷つけていたら、今度会った時には、君を愛と官能の喜びと陶

酔で包みたい。あらゆる肉の楽しみで君を満たし、それで君に嫌というほどの思いをさせ、死ぬほどの気持ちを味あわせたい。」

1846年8月15日
ルイズ・コレ宛²⁾

以上のように、フローベールは彼女との恋の情熱を語っている。そして、クロワッセで生活していた彼は、大体2ヶ月毎にパリで、後にはマントで彼女に会っていた。絶えず一緒にいれば、彼女の浮気にも悩まされ、苦しめられただろうが、離れた所から恋の快感を味わい、彼女を夢みるといったこの離れた恋は、彼には、好都合であった。ラ・ヴァランドの述べるように、この恋愛は、フローベールにとって、ある軽蔑を基調としただけに、隷属を強いられることもなく、夢見心地や神秘的な冥想によって仕事を妨げられることもなく、皮肉屋で勉強家のフローベールには、打って付けの情事だった¹⁰⁾。この恋愛は、次のように展開していく。1846年4月4日、ルイズは、マントでフローベールの愛人となる。感情をさらけ出し、彼のそばにいないことが我慢できなかった。ルイズの激しい情熱を前にして彼はたじろぎはじめた。フローベールはルイズに手紙を送る。

「私をそんなに愛してはいけません。私には苦痛です！僕の方に愛させなさい。愛しすぎるのは、どちらにも不幸をもたらすことを君は知らないのですか。」

1846年8月9日
ルイズ・コレ宛²⁾

さらに、パリで一緒に暮らし、一冊の書物を二人で書くことを望むルイズに対して、フローベールは怒りさえ覚える。

「叫び声を抑えなさい。私は引き裂かれそうだ。」

1846年8月9日
ルイズ・コレ宛²⁾

フローベールは、ルイズに安直な肉欲の満足以外に知的な友情をも期待した。彼女との恋愛についての考え方の相違のために、1849年、二人は絶交状態だった。フローベールは東方旅行に出かける途中、パリに寄っても彼女と会おうとせず、旅行中、手紙も出さなかった。旅行後、ルイズが夫も愛も金も失ったことを彼は知り、再び交際が始まる。『ボヴァリー夫人』の制作やフローベールの創作態度に関す

る書簡は、この時期に多く書かれている。ルイズは、フローベールの反対にもかかわらず、彼の母への紹介を執拗に迫ったため、ついに二人は決定的に絶縁する。『ボヴァリー夫人』出版の2年前のこの絶縁の後フローベールにとって、恋は穏やかな、距離をおいた形で存在するだけだった。

以上、フローベールの恋愛体験を3段階に分けてみてきたが、結局、彼にとって、恋とは何であったのだろうか。彼の愛した女性、シュレザンジェ夫人、フーコー夫人、ルイズは、フローベールよりも10才ほど年上で、30代の豊満な女性である。しかも、心の奥に我が身を顧みない危険な情熱を秘めた女性である。フローベールは恋において、保護され守られることが必要であり、過去の厚みを付けた豊満な母性的女性を偏愛する傾向があった。この点について、チボーデは、彼の性格の弱さと母性的女性への憧れを挙げている¹¹⁾。『11月』において、フローベール自身次のように書いている。

「ほとんどすべての人が探し求める型というものは、空に描いた恋か或いは少年時代に抱いていた恋の思い出にすぎないのかもしれない。僕たちはこの恋に関わりのあるものなら何でも探し求める。気に入った二度目の女というものは殆どいつも、最初の女に似ているものである。どれもこれも愛するようには、非常な墮落さか、さもなければ非常に広い心が必要である。作家達が語りまた倦もせず何度も描く女が、如何にいつも同じであるかを考えてみたまえ^{5,12)}。」

『狂人の手記』のマリヤ、『11月』のマリヤ、『感情教育』のルノー夫人、アルヌー夫人、そしてエンマ・ボヴァリーは、フローベールによって愛されたこのタイプの文学的代表的である。また、彼の恋には、距離が、つまり本質的には記憶による理想化と変わりない空間による理想化が必要である。シュレザンジェ夫人、フーコー夫人との恋は、夢の世界、憧れの世界のものであり、ルイズとの恋は、空間的距離を保った、文学的恋である。フローベールにとって、孤独は神聖であり、女達は、ただ通りすがりに花を添えて、その孤独に触れただけである。そして愛は、物を見、又感ずる一つの方法にすぎないのである。彼は、恋について1872年、ジョルジュ・サンド¹⁵⁾に宛てて、次のように語っている。

「私の生活には、かつて女性が入り込んで来たことはありません。……私という人間には、これから先ずっと自分の存在を他の人に押し付けていくには、

個性的なところが強すぎるのです。私には、人に知られない聖職的なものがあるのです。」

1872年10月28日

ジョルジュ・サンド宛²⁾

強い想像力を持つ彼は、すべてのものを文字に結晶させ、現実とは、その種を求めるだけである。現実をより美しいものに夢み、また現実をより真実なものに再構成するのである。彼は、本当の意味で、一人の女性を所有したことはなく、あらゆる女性が常に夢の、彼の理想化した女性の性質を帯びている。恋は、彼にとって、美の中での制作・文学的制作だったのである。女性は、彼の生活の中で、肉体的位置と文学的位置を示しただけである。フローベールの全ての生活を次第に併合していくのは文学である。

フローベールの人間の恋愛

フローベールの人間は、恋愛についても一時的な幸福感しか味わえず、常に新しい夢を求めて苦悩する。夢→挫折→倦怠→夢といった構造で繰り返され、短い生涯を終えるまで、彼らの夢は、そこに身を委すと同時に次々とその手中に砕け散るのである。『11月』の主人公は、恋を実現することができた後も満足することなく、常に新しい夢を求め続けるのである。フローベールの人間にとって、恋愛も夢と現実の相剋であり、夢が一つ一つ打ち壊され、遂には、夢の描き手である彼ら自信も滅び去るのである。『11月』の主人公の恋愛について、以下、述べていきたい。

学生時代の主人公は欲望に燃え、烈しい恋に憧れる。彼にとって、幸福とは、自習室の昼、寄宿舎の夜を問わず、常に時の断片を所有することであり、その時を空想に費やすことであった。内部の天性ともいべきものが、あたかも無限に湧き出すように表われて来るが、実際の行動によっては、発揮され得ないものである。彼の胸の中で、恋愛、女性といった夢がだんだんと膨らんでいった。

「欲望に燃え、何か無暴な動揺した生活に対して烈しい恋を抱いていた。色事を夢に、それらを全部経験してみたいと思った^{5,13)}。」

彼は恋したい欲望に捉えられ、限らない貪欲さで恋を求めた。この恋の憧れと新しい感情の要求は、彼の空想の中で、神聖化され高揚していくのである。恋の空想において、女性は神秘的で魅力的な存在であり、彼のすべての要求を満たしてくれるものと信じる。彼は語る。

「女というものは、僕には一つの魅力ある神秘であって、それが僕の子供らしい頭を情けないことに掻き乱すのだった。……何か人間の意志をも溶かしてしまうような致命的なものがあるのを、僕は自分の経験で既に感じていた。そしてそれを喜びもしたが、恐れもした^{5,14)}。」

彼は果てしない情熱に掻き乱され、華やかな空想の中に、いろいろな快樂を求めていた。女とか情婦とかいった言葉を書物や絵に求めた彼は、ある日、何もかも見抜いてしまい、以前よりも、いっそう喜びを覚えた。欲望は、それだけで満足していた。しかし、この幸福感もやがて醒め、現実の自分の惨めさに気付き、激しい変化や大事件を待つ。ここに、結婚に不満を覚え、退屈な日常生活の中で、大事件を待ち望むエンマ・ボヴァリーの姿が窺われる。

「毎朝、眼を醒ますと、今日こそ、それが舞い込むだろうと期待した。そうして、あらゆる物音に耳を澄まし、跳び起きてみて、それがやって来ないのを不思議に思った。やがて、日暮れになると、いつもひとしお淋しくなって明日という日を待ち侘びた^{5,15)}。」

エンマがレオンに恋を求めたのと同様に『11月』の主人公は、現実から抜け出すために烈しい恋を求める。しかし、それも不可能であることを知ると、死が必然的となり、死によって救われることを欲し始める。

「僕は自分の青春と将来を並べて考えた。が、なんという情けない青春だろう！なんという空虚な将来だろう！……そこから僕を救い出してくれるものは、烈しい恋だけである。が、僕はこの恋を何かこの世で得られないもののように感じて、かつて空想した幸福をひどく懐かしんだ。すると、死が美しく見えた。僕はいつでも死を愛し求めてきた¹⁶⁾。」

彼にとって死は、恋の空想と同様に、自分の惨めな現実から逃避するための最後の手段にすぎないのである。死は、人間にとって必然的な結果であり、それから逃れることはできないが一方、人間は常に死のことを考え、心の中で秘かに死を望むことがある。マリヤという女性を知る以前の主人公は、人生の平凡さと倦怠から逃れるために、烈しい恋や情熱やさまざまな快樂を夢みるが、それが実現不可能なことを悟ると死が必然的となり、死への空想を始め

るのである。

マリヤという女性によって、恋の空想を実現することができた主人公は、最上の喜びと幸福感を味わうはずである。しかし、彼が味わった幸福感は一瞬のことで、彼はやはり、何ともいえない悲しみと倦怠感に襲われる。この倦怠感と同時に烈しい欲望を感じ、再び新しい夢を求め始める。「過ぎし日の心待ちにしていた気持ち」と「今の切ない倦怠」とを思い比べる。彼は、飽き足りたときの「嘔気」と「烈しい欲望」を同時に感じたのである。今まで、空想の世界だけに恋が存在していたのに対して、恋が現実存在した今となっては、彼の美しい恋の夢は破れ、彼は再び現実の倦怠に引き戻されたのであろう。そのために、幸福のはずの彼は、悲しみや倦怠感に襲われ、新しい夢を求めるのである。恋の現実化は、彼をいっそう現実に戻す結果となったに過ぎない。欲望と倦怠に満ちたマリヤとの生活から逃れるために別れるが、彼が常に捜し求めるのは、彼女との思い出や恋の情熱である。彼は自分の恋の弱さへの恐れと以前とは違った「愚かしく悪酒に酔った男の倦怠」を感じた。思い出による倦怠は、ちょうど『ボヴァリー夫人』のヴォビエサル舞踏会の後のエンマを思い出すであろう。エンマは、勿体ぶった舞踏会に無邪気に同化し、そこに鮮やかな夢を織る。彼女は、この陶醉に酔って夜明けまで踊り狂い、トストに帰ってからも、その思い出を反芻する。

「こうした舞踏会を思い出すことは、エンマにとって一つの仕事となった。水曜日が回って来る度に、朝、眼を醒ますとこう思った。『ああ！8月前には……15月前には……3週間前にはあそこに居たのだ』と^{5,17)}。」

シャルルとの冷たい生活の中で、彼女の夢は薄れ、ただ、生きた感覚と未練だけがそこに残った。未練から来る焦燥は、ただその実生活の鉛のような倦怠を彼女に明かすのだ。この恐ろしい倦怠から更に彼女は激しい勢いで、新しい夢、ロドルフへの激しい恋の欲望へ駆りたてられた。エンマに比べて、『11月』の主人公は、この倦怠に浸って、新しい夢を追う気力は失っている。彼は倦怠から逃れるために枯葉が風に舞うように、飛び去って二度と戻ることなくどこかへ行っていきたい。と思いつつも、何の望みもなく何の変哲もない退屈な日常生活を送った。

「彼は退屈さ—恐ろしい習慣—に憔悴切ってその結果である麻醉状態に相当の快感さえ見出した。彼は、まるで死ぬことばかり考えている人のようだった。

た。彼は、もう風に当たるために窓を開けるでもなく、手も洗わず、乞食のような不潔さの中で暮らしていた^{5,18)}。」

彼は存在感が全くなく、無に等しく、すべてを軽蔑する苦悩を背負った。彼はこの苦悩から死へ救いを求めるが、その死の瞬間に直面すると死を逃れ、現実の平凡さと倦怠の苦悩に耐えながら死んでゆくのである。ジャン・ブリュノーは次のように解説している。

『『11月』の主人公は、自分自身のために愛を探し求め……彼にとって情熱は絶対的価値をもつのである。彼は、絶対的な愛の空想的追及の犠牲である^{5,19)}。』

結局、フローベールの人間の不幸の原因は何であろうか。エンマが『ボヴァリー夫人』の中で述べている。

「自分が幸福ではないし、今まで幸福だったことは一度だってない。生活のこの空虚感、寄りかかるものがたちどころに崩れてしまう感じは一体どこから来るのだろうか。……もしこの世のどこかに逞しく美しい人、熱狂と洗練とを合わせ備えた勇ましい気質、……詩人の心があるならば、それにふと巡り合えないことがどうしてあろう^{5,20)}。」

このように、フローベールの人間は人生に至福や情熱や陶醉を信じすぎている。彼らは、自分を取り巻くものを拒み、別の人生を夢みている。チボーデの言葉を借りれば、彼らは、まさしくボヴァリー症である。彼らが望むものすべてが接触の即時性によって駄目にされている。この根本的な自制力の欠如—自分の夢をががつ求める—こそが、ボヴァリー症の一面である。彼らが、情熱や至福や別の人生を夢みる限り、必ず人生に失敗するだろう。彼らにとって幸福に生きるための条件は、倦怠即ちこの複雑な内容を有する不幸、今よりも更に快適な生活がないのに堪えることである。夢を実現しようとしなくて極めて低い次元で諦めることである。彼らはあるがままの人生を率直に受け入れ、自分の周囲のための行為、愛着目的の中で、自分自身を造り上げていかなければならない。

虚無思想の背景と創作の苦悩

フローベールの人間にみられる虚無感はどこから来るものだろうか。フローベールの虚無感と少年時

代から青年時代の彼の生活環境とは、無関係であるとはいえないだろう。病院の陰惨な風景、幼い頃からの文学活動は見逃せないものである。

フローベールにとって、ルアンの慈善病院の陰惨な風景は複雑で決定的なものだった。チボーデは、この場所を次のように語る。

「ルアン市立病院の院長の官舎は、19世紀後半のフランス小説の主流の人たちにやがて与えられるであろうところの厭世的な現世間が培われた場所と考えられるだろう²¹⁾。」

それ故、人間の運命とか悲惨に直面して育ったフローベールは、生も愛さないし、死も怖れない。

「僕は絶えず解剖する。それが面白いのだ。そして、人が純だと思っているものに腐敗を、きれいな場所に腫物を見つけて笑うのだ。そんなわけで、空虚がすべての土台であり、人が良心を叫ぶものさえ、内的な空虚にすぎない。という強い確信を持つに至ったのだ。」

1838年12月26日
エルネスト・シュバリエ宛²⁾†6)

彼の心は、段々と絶望の深淵へ沈んでいく。虚無から厭世へ、厭世から絶望へと深刻化する世紀病は、法律の厭悪、神経症の発病、父と妹の死によって愈々救い難いものになる。また、フローベールに最初の文学の夢を与えるのは、召使のジュリィ^{†7)}の伝説と隣家のミニユ氏の書齋^{†8)}の文学書である。彼の演劇ごっこが始まったのもこの頃である。エルネスト・シュバリエ、ルポワトヴァンら4、5人の友人と子供芝居を演ずることによって、少年の夢を築いていく。この夢の世界の創造は、少年の心に忍び込んだ虚無思想を追放する唯一の手段であった。

また、青春時代のフローベールはロマンチズムに傾倒していた。

「ミュッセはかつて私を非常に熱狂させました。抒情、放浪、観念的虚勢や表現の誇大といったもので、私の精神を彼は擦ったのです。」

1852年9月25日
ルイーズ・コレ宛²⁾

「実際、僕が深く尊敬するのは、ただ二人。バイロンとラブレールだけだ。この二人だけが人類に害を与え、それを面と向かって嘲笑するために書いたのだ。」

1838年9月13日

エルネスト・シュバリエ宛²⁾

と、17才の彼は言う。ブルジュワへの憎悪、凡庸な生活への軽蔑、自己への絶望など彼のロマンチックな青春には、おそらく、真の文学的才能の具現を除いて何一つ欠けていなかっただろう。

「君もよく知っているように……僕の青春時代何か知らないが、やたらと物に嫌気を起こさせる阿片に侵されてしまって、とうとう一生涯、それから逃げられなくなってしまったらしい。」

1851年10月21日
マクシム・デュ・カン宛²⁾†9)

このように、中学時代から神経症の発作に襲われるまでの10年間の学生生活は、彼の資質と環境においての闘いの時代であった。さらに、神経症の発作は孤独への幽閉となり、彼の青春時代に終止符を打つことになった。彼の虚無思想は、一層暗さを増し、彼の心に重くのし掛かる。

ところで、フローベールは、如何にして、この虚無思想から逃れ、自我の世界から飛び出したのであろうか。フローベールは、虚無感から逃れ、文学的創造の苦悩を乗り越え、彼の芸術観を形成していったとよく言われる。そこで、彼の創造の過程を辿るとともに、彼の苦悩を追ってみたいと思う。

フローベールは孤独に苦しめば苦しむ程、自己の存在感を失った。彼にとって、芸術以外のものは平凡で醜悪な嫌悪を催すものである。そして、彼は、文学のみが存在する世界に籠もり、全ての本質的姿を見究め、普遍的な絶対の真実や純粋な美を引き出すことに努めた。絶対的美の存在の確信と探求に対する誇りによって、彼は犠牲と忍耐の生活に堪えることができたのだろう。文体の悪魔に取り付かれても、彼の渴望の大きさによって、その苦悩は価値あるものになった。もし、容易に手に入れられたならば、幻滅に終わったであろうが、彼には手の届かないものであったために、その苦しみも渴望も増大し、価値があるのである。これは、作品中のフローベールの人間との大きな違いである。精神的苦しみを体験しながらその成果を文章にすることができなかった『初稿感情教育』のジュール^{†10)}と異なって、フローベールは鋭い官能の刻印を受けた現実の印象を思い出として対象化し、作品に描くことができた。思い出を純粋に客観化し得る観念の作業と感性の氾濫に苦しむ彼の意力の姿こそ、やがて彼の制作に独自の生命を与えるべき素材である。また、フロー

ベールは書くことを通じて、自己と言葉との関係の中に、存在の基盤を見出したのである。彼は、分析的で観察と方法の作業であり、思考を押し進める手段である言語を追求した。

「表現が思考に近づき、言葉がそれぞれにぴったりとくっついて、いわば消失していけば、それだけ作品は美しくなる。」

1852年1月16日
ルイーズ・コレ宛²⁾

フローベールにおいて、言語は叙述的力で彼の作り出そうとする虚構の道具となる。描写は、事物と表裏一体に溶け合った感情の分析と表現である。思想と形の一致という理想が実現されたならば、真の芸術が生まれるだろうが、それは極めて困難であった。

「既に私の想像力は消耗し、筆の力も衰えました。私の文章は私をうんざりさせます。」

1846年8月9日
ルイーズ・コレ宛²⁾

理想の実現に近づこうとすれば、いっそう想像力の涸渇を自覚される。しかし、彼は「パリ評論」を本拠として既に活躍しているデュ・カンと異なって、売名的野心を拒み、自我の世界から飛び出すために、文学に専念している。彼はマクシム・デュ・カンを次のように軽蔑している。

「ニュースあり。若きデュ・カン。四等レジオンドヌール勲章受賞者となる。……今に彼は地位を一つせしめて、かの心慰む文学なんかおっぼり出しますから。彼の頭の中ですべてが混沌しています。女、勲章、芸術、長靴こんなものが皆同じ水準でぐるぐる回っていて、来世に役立つものであれば重要ということになるのです。」

1853年1月15日
ルイーズ・コレ宛²⁾

これに対して、フローベールが考えているのは、芸術観の確立と実現である。芸術観の確立をめざして出版された『ボヴァリー夫人』を読んでこう言っている。

「……印刷された僕の作品をみて全くがっかりしてしまった。最もつまらない作品に見えたのだ。唯、黒々と印刷された跡が見えるだけだ。全く前のまま

だ。これは私の大きな誤算だった。」

1856年10月5日
ルイ・ブイエ宛²⁾

フローベールの小説には、現実の物語、永遠に表れる倦怠と人生の失敗が描かれている。夢想から失望に、更に新しい夢想に、内在した倦怠にと永久に揺れ動いていくところに彼の小説は形成される。しかし、自分の作品に対して彼は幻滅を覚えている。作品は19世紀小説史の王座を獲得したが、フローベールは満足できず、絶望している。フローベールが現実の生活に幸福を求めるのが難しかったのは、フローベール的人間と同様に、人生に対して要求度が強かったためである。フローベールは、人生に幸福を求める以上、すべてを満たすに足りる絶対の幸福を求めたが、彼の実生活は、この貧欲な要求を前にして、なすところを知らなかったのである。この点で作品の成功にもかかわらず、19世紀の偉大な小説家、フローベールは、悲しい運命を辿ったと思われる。虚無感から逃れるための文学的創造によっても、フローベールは虚無を征服し得なかったのではないだろうか。だからこそ、虚無は、フローベールの文学の不変のテーマとなったのである。

おわりに

愛に満ちた日々とは、幸福の瞬間と言い代えてもいいだろう。若き日のフローベールが地上の愛をしっかりとつかみとることができないように、フローベール的人間も、ついに愛も、いかなる幸福をも掌中にし得ない人間である。

夢と欲望に充満した人間、ふくれあがった内面によってはちきれそうになった人間であれば、偶然、欲望を満足される機会を持ったとしてもそこに冷え冷えとした期待はずれの感覚しか味わえないのも当然かも知れない。

決して満足させられることのない存在であるフローベール的人間は、いったん実現された快樂の後に大きな快樂を求めてやまない。

世間というものは、そこにひとりぼっちで歩んでいるものにとっては、何と空虚なところだろう！自分はこれから何をすればいいのか？どうやって時間を過ごせばいいのか？自分の頭脳をどんなことに使おうか^{5,22)}？

これが、1842年のフローベールの心的状態である。

それはもはや、最終の虚無感と言っていいだろう。なぜなら、救いなどというものは、そもそも初めから

存在しないというのではなく、いったんは救いの可能性が示唆されながら、それが無残に奪い取られるからである。このとき人間はいつそう絶望的で、無力な悲劇的存在に見えてくる。そして、フローベ

ルがエンマ・ボヴァリーの死に描いたものは、実はこのような虚無観の極致ではなかったかと、私には思えるのである。

注

- †1) Gerteude (1819生まれ), Henriette (1823生まれ): シャンゼリゼにあるコリア家にパリ滞在中フローベールはよく通った。常に病身のヘリエットの枕元で彼はロマンチックな文学を読んで聞かせる。彼女ら一家が英国に帰った後も書簡を交換し、『ボヴァリー夫人』執筆中もジェルトリュードとハイドパークを散歩している。この二人の姉妹は幸福な時代の家庭を思い出させる。
- †2) ビレネー山脈及びコルシカ島周遊の旅。大学入学資格試験の合格の祝いに計画される。彼の父の友人のクロケ博士と妹のカロリーヌ、神父の3人が同行。
- †3) Louis Bouilhet ルアンのリセで彼の同級生(1882-1869) 医学に進んだが、文学を求めてラテン語や国語を教える復習
- †4) Padier Games ジュネーブ生まれの彫刻家(1792-1852) ギュスターブは彼のサロンでユゴーやルイーゼと出会う。彼の妻の不倫は《ボヴァリー夫人》のエンマの姦通と負債の描写の資料源になる。
- †5) Sand, George (1804-1876) 《感情教育》執筆のころからフローベールと親密になり、彼女に芸術的苦悩を訴えている。彼女を「師」と呼んで、クロワッセの自宅に招いている。二人が知り合ったのは「マニータ食会」においてである。
- †6) Ernest Chevalier 少年期以来の友人。パリの法学部まで同級、その後、司法官、県会議員、下院議員等をつとめる。
- †7) Julie コール県の片田舎の生まれの素朴な女中。1825-1883年までの間フローベールの家で暮らす。
- †8) Mignot エルネスト・シュパリエの大伯父で、ルアン市立病院の筋向いに住んでいた。幼年期時代のフローベールに『ドンキーホーテ』の魅力を教えた。
- †9) Maxime Du Camp (1802-1894) ギュスターブが法学部在学中に知りあって文学を語り合った仲間。ブリュターニュ旅行、東邦旅行に同行し、『ボヴァリー夫人』の出版に力を貸した。しかし、実務的な才能にたけた保護者意識はギュスターブの反感を買い、決別。その『文学的回想』はある種の偏見を差し引きすればフローベールに関する貴重な文学的資料を構成する。
- †10) Jules は女優リュサンドに失恋し、死を覚悟するが、その苦しみに快感を覚える。金、女、名誉などの欲望がこの世には存在しないこと。

文 献

- 1) Jean Bruneau (1962) *Les Débuts littéraires de Gustave Flaubert*, Chapitre XI, Armand Colin, p312.
- 2) 書簡は Correspondance = ed. établie par Jean Bruneau (1926-1954) Conard, 13 volumes (1973-1980) tome I et II, Gallimard, La Pleiade を基に本文中に年月日と宛名のみを表示。
- 3) LaVarende (1951) *Flaubert par lui-même*, Seuil, p22.
- 4) Albert Thibaudet (1935) *Flaubert, sa vie, ses romans, son atyle*, Gallimard, p27.
- 5) 本論におけるフローベールの作品からの引用は、フローベール全集 I (1965), V (1966), VI (1967), VII (1968) 筑摩書房; 伊吹武彦, 沢田潤, 島田尚一他訳から行い、引用文献に原典を表示。
- 6) *Novembre* = éd. de Jacques Suffel (1980) Garnier-Flammarion, p431.
- 7) *Novembre* = éd. de Jacques Suffel (1980) Garnier-Flammarion, p427.
- 8) Jean Bruneau (1962) *Les Débuts littéraires de Gustave Flaubert* (1831-1845) Armand Colin, p327.
- 9) Jean Bruneau (1962) *Les Débuts littéraires de Gustave Flaubert* (1831-1845) Armand Colin, p317.
- 10) La Varend (1951) *Flaubert par lui-même*, Seuil, p27.
- 11) Albert Thibaudet (1935) *Gustave Flaubert*, Gallimard, p27.
- 12) *Novembre* = éd. de Jacques Suffel (1980) Garnier-Flammarion, p449.
- 13) *Novembre* = éd. de Jacques Suffel (1980) Garnier-Flammarion, p381.
- 14) *Novembre* = éd. de Jacques Suffel (1980) Garnier-Flammarion, p382.
- 15) *Madame Bovary* = éd. de Cl Gothot-Mersch (1971) Garnier, p73.

- 16) Enid Starkie (1967) *Flaubert jeunesse et maturité*, Mercure de France, p401.
 17) *Madame Bovary* = éd. de Cl Gothot-Mersch (1971) Garnier, p66.
 18) *Novembre* = éd. de Jacques Suffel (1980) Garnier-Flammarion, p464.
 19) Jean Bruneau (1962) *Les Débuts littéraires de Gustave Flaubert (1831-1845)* Armand Colin, p343.
 20) *Madame Bovary* = éd. de Cl Gothot-Mersch (1971) Garnier, p335.
 21) Albert Thibaudet (1935) *Gustave Flaubert*, Gallimard, p11.
 32) *Novembre* = éd. de Jacques Suffel (1980) Garnier-Flammarion, p503.

(平成13年11月16日受理)

The Background of Flaubert's Nihilistic Thought and Creative Suffering as seen in *November*

Fumiko MORIMASA

(Accepted Nov. 16, 2001)

Key words : *NOVEMBER*, FLAUBERT, HERO OR HEROINE, LOVE, NIHILISTIC THOUGHT

Abstract

Gustave Flaubert, the author of *Madame Bovary* which is highly rated as a masterpiece of realism, is called the father of the modern novels. However, his works before this masterpiece were regarded as romantic. One of these works, *November*, played an important role as a transition between his adolescence and his prime of life. In this novel, Flaubert described his impressionable youth and his suffering from nihilistic thought.

Flaubert himself could not experience real love. Neither could he experience the happiness of loving and being loved, because he was busy to seeking many experiences for his life. In his works he always described in his works women with noble mind and pure flesh in order to show their aesthetic value which could be idealized only in literature.

The heroes or heroines in Flaubert's works can experience only temporary satisfaction with love. The next moment they begin to wander and suffer in search of a new love. And, on realizing that they cannot meet it, they become nihilistic, and are seized with an impulse toward death. As a result they want to be relieved from their sufferings by dying. This idea is exactly what is called the "Bovary syndrome".

Flaubert describes eternal (endless) weariness and failure in life in his works. His outstanding imagination crystallizes everything into his literature and attempts to reconstitute reality to make it more truthful, dreaming that reality should be more beautiful.

In spite of the great success of his works, Flaubert, this great novelist of the 19th century, was not satisfied with what he was able to write. Although in his younger days he devoted himself to literary creation to escape from nihilistic thought, he seemed not to be able to transcend the darkness of his mind. That is why his nihilistic thought is regarded as one of Flaubert's main unchangeable themes.

Correspondence to : Fumiko MORIMASA Kawasaki University of Medical Welfare
 Kurashiki, 701-0193, Japan

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.11, No.2, 2001 261-270)